

26期生の皆様－3（なぜ哲学を学ぶか）

連休もあっという間でしたね。楽しいことをしていると時間が速く過ぎ去り、辛いことだとなかなか時間が進まない。これは時間の特徴としてアインシュタインが指摘したことですが、すでにアリストテレスも時間が個々のものに関わることを教えていました。

さて、君たちの中には「なぜ受験科目でもない哲学なんてことを勉強するのか」という疑問を持っている人があるかも知れません。そこで今日は「私がなぜ哲学を教えたいのか」を説明したいと思います。教育の目的は「真理の探究と人格の完成」と思います。しかし、日本では教育目的の中心に大学受験があります。これはある程度当然で、そのために受験科目である英数国理社がしっかり教えられます。でもこれらの受験科目だけで人生に必要なことをすべて学べるのでは毛頭ありません。特に哲学という科目（西洋では普通あるようです）がない。ただし日本にも「倫理」という科目があって、これを履修すれば哲学だけでなく宗教も含めた様々な思想について勉強できます。しかし、この科目は選択制で、また残念ながらそれを選択する人は少ないようです。

哲学という学問は、他の学問に比べて特殊なところがあります。たとえば数学は数、物理は物質というように、その対象が限られているので個別学問（特殊学問）と呼ばれますが、哲学は存在するものすべてを対象とします。アリストテレスはこのことに建築にたとえています。家を建てるには家の設計をする建築家（これを彼は棟梁と呼んでいる）と、その指図に従って、柱や石を削ったりそれを積み重ねたり組み立てたりする石工や大工といった職人が必要だ。職人たちは自分の割り当てられた仕事だけすればよいが、彼らの仕事を統括するのが建築家で、建築家は実際には石や柱を切ったり運んだりせず、一見すると何もしていないかのように見えるが、実は彼がいないと、いくら石工や大工が一生懸命働いても家は建たない。それと同じように、哲学とは他の諸々の個別学問の上に立ち全体を見渡す棟梁的学問である、と言うのです。



つまり、みんながよく英語を話せるようになって、あるいは数学がよくできるようになっても、もししっかりした哲学的考えを身につけていなかったら、人間として「よく生きる」ことはできないというのです。では、哲学を習わない人は人間失格なのかというところではありません。なぜなら、「人はどう生きるべきか」という基本的な問題は、程度の差こそあれ、普通は小さいときから両親や大人から習っているからです。ただし、親や先生たちから（信者なら教会で）習っている知識は、前回話した「経験知」であって、「なぜそうすべきか」を理論的に説明することは普通ありません。もし哲学（まともな哲学）を勉強すれば、人生において重要な判断を迫られるとき、落ち着いて考えて答えを出すことができます。

車寅次郎（写真下）という人が「なぜ大学に行くんだらう」と甥っ子（写真右）に聞かれてこう答えています。「つまりあれだよ、ほら、人間長い間生きて



りゃ色々な事にぶつかるだらう。そんな時に俺みたいに勉強していない奴は、振ったサイコロの出た目で決めるとか、その日の気分で決めるしかしようがないんだ。ところが、勉強した奴は自分の頭できちんと筋道を立てて、はて、こういうときはどうしたらいいかなと考えることができるんだなあ。だからみんな大学に行くんじゃないか」と。ただし、人間には理性の他



に感情というものがあって、いくら筋道たてて考えて答えを得ても、感情に流されて誤った行動をとることも十分あります。だから普段から感情をコントロールする訓練をしておきましょう。

前回、学問とは「原因についての確かな知識」というアリストテレスの定義を紹介しました。本当に知っていると言うことは、その原因を説明できることだと言うのです。みんなも、自分が勉強していることを本当に理解しているかどうかを知りたいければ、「なぜそうなるの」と尋ねてくる友達に説明をしてみたらいいです。自分ではわかっていると思っていたことが、いざ他人に説明しようとするときできないことがあります。それは実は本当に理解していなかったということなのです。

ところで、哲学も学問なので原因を追及するのですが、何の原因でしょうか。それは「最も根本的な原因」です。『徒然草』にまだ8歳だった兼好法師がお父さんに「ホトケとは誰ですか」と尋ねるとお父さんは「それはホトケの教えを学ぶ人間がホトケになるのだ」と答えます。それを聞いて子供は「そのホトケの教えを教えた人は、誰にホトケの教えを学んだのですか」と引き下がらない。結局問題は「最初にホトケになった人はどうやってホトケになったのですか」ということで、それに対してお父さんは「そんなこと、ほっとけ」とは言わずに、正直に自分が答えられないことを認めて子供の賢さに喜んだとあります（243段）。



この子供の兼好法師が尋ねたのが、哲学で探求する「最も根本的な原因」です。アリストテレスはそれを「第一原因」と呼んでいます。この第一原因は、個別学問では追求しません。個別学問では、私たちに近い原因を探求します。哲学では最も遠くにある原因を探すと云えます。最も遠くにあるので、その探究は近い原因よりも難しいです。哲学では「最も深いこと」を考えます。つまり物事の表面的な理解で満足しないという態度です。これも私が哲学を教えた理由の一つです。みんなには物事を深く考える習慣をつけて欲しいということです。この深く考えると言うことは、具体的に言うと、8歳の兼好法師のように「なぜ」と問い続けることなのです。

「子供はみんな哲学者」と言うそうです。兼好法師のように子供は「なぜ、なぜ」といつも疑問をぶつけてくるでしょう。これは哲学者の態度です。しかし、問うのは誰でもできるが、その間に答えを出すのはとても難しいことです。そこで、人類の歴史で「なぜ」とことん追求した非凡な人たちの考えを知り、究極の原因についてどう考えたら良いのかのヒントを得ようというわけです。この意味でも、哲学を勉強することは役に立つと云っているのです。

さらに、第一の原因について研究するのは神について研究することです。ひとくちに哲学と言っても、実は認識論、存在論、心理学、倫理学などの分野に分かれているのですが、その中で最も根本的な分野を、アリストテレスは「神学」とも呼んだのはそういうわけです（現在では形而上学と言われる）。これも私が哲学を教えた理由です。宗教で学ぶ「神」は、世界史上の錚々たる思想家たちが、ある人は肯定し、ある人は否定しながら、いつも探求してきたものだということを知ってもらいたいのです。たとえば、有名なカントは「私の知りたいことは三つ。神、人の魂、もの自体」と言っています。日本ではそう思われていませんが、神の問題は重大なテーマなのです。

こうして哲学によって、広い視野と深い洞察力を少しでも身につけることができればと願っています。